

第2回 李朝木工研究会 「李朝木工家具の魅力」

開催日 2011年6月25日(土)

会場 松本民芸館

講師 尾久彰三氏 日本民藝館・元学芸部長/武蔵野美術大学非常勤講師

参加者数 31名(木工会会員9名)

報告者 片山浩二



今回は、李朝家具について第一人者でもあり、骨董にも詳しい尾久彰三氏を講師に迎え、松本民芸館で「李朝木工研究会」が開催されました。

・尾久氏のプロフィール

1947年、富山県生れ。早稲田大学大学院文学研究科美術史学科修士課程修了後、1978年、日本民藝館に入る。柳宗悦とともに民藝運動を行っていた伯父・安川慶一の影響により、10代からものを蒐める悦びに開眼。日本民藝館学芸部長として活動するかわら、テレビ番組への出演や、講演会も行っていました。主著に『愉快的骨董』(1997年、晶文社)、『身近な骨董・李朝に入門』共著(1998年、文化出版局)『これは「骨董」ではない』(1999年、晶文社)、『貧好きの骨董』(2003年、晶文社)、『丸ごと韓国骨董ばなし』(2006年、バジリコ)『観じる民藝』(2010年、世界文化社)。

前半は、自ら長年にわたって関わってきた民藝についての経歴や関わってきた多くの民藝の活動家の方々のお話をお聞きしました。

自身も若い頃から、柳宗悦とともに民藝運動を行っていた伯父・安川慶とともに、各地をまわり、骨董屋巡りをしながら、観る目を養ってきたそうです。

尾久さんはこのようにも言うておられました。”皆さんのような木工家など作り手は、作る手で物がわかるようになり、私は目で観ることでわかる”と。

そして、なにか一つでも極めることができれば、自ずと違うさまざまな分野のこともわかるようになるのだと。それなので美しいものを作ることにこだわりなさいと。

やはり、モノ作りの作り手として、美しいものは何かというのは、大きなテーマの一つになると思います。ここではどうすれば美しいものがわかるかについての話はありませんでした。しかし、尾久さんの著書の『観じる民藝』の中でこのように書かれています。まずは、自己の考えや知識を捨てて、物を観ること、そして、分かろうとするのではなく、感じることだ…と。



後半は、李朝家具についてのお話となり、松本民藝館の展示されている家具を見ながら、解説をしていただきました。お話の中で、記憶に残ったことですが、家具はもともと軽いものが好まれていたので、膳などは、小指で持てるくらい軽いものが、よい膳であるとされる。

材料は、本来は黒松が多く使われてきた。ケヤキなどは重いのでむしろ日本向けに作られたのではないか。李朝家具も、いいものは韓国にはほとんどなく、日本の方がまだ見つかることがあるようです。

今回、松本民芸館所蔵の李朝家具を見ながら、興味深い解説を頂き、さらに李朝家具についての関心が増すと共に、今後のモノづくりにも生かしていきたいと感じました。以下は、松本民芸館の展示です。(木工展 H23 4月26日～7月3日)



↑十二角虎足膳（李朝）



↑たんす（李朝）



↑たんす（李朝）



↑人形（李朝）



↑木箱（李朝）



↑厨子（李朝）